

## 直接引用文の埋め込み構造\*

廣江 顕

長崎大学言語教育研究センター

### Embedding Direct Quotes

Akira HIROE

Center for Languages Studies, Nagasaki University

#### Abstract

In this paper it is shown how direct quotes are embedded in the entire sentences with the reporting clauses and what mechanism makes it possible for embedded direct quotes to have their own and different illocutionary forces than those in the reporting clauses, thereby inducing root phenomena.

Keywords: direct quote, clausal adjunct, illocutionary force,  
bare-embedding

#### 1. はじめに

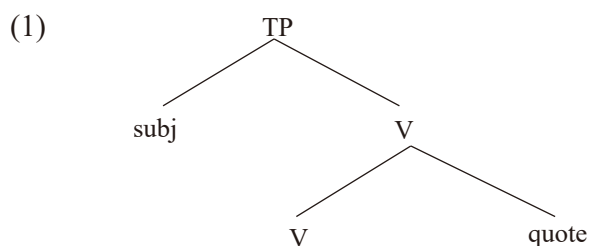
本論では、直接引用文(direct quote)が伝達節(reporting clause)を伴う文構造全体にどのような形式で埋め込まれているのか、また埋め込まれた直接引用文がどのようなメカニズムで伝達節とは異なる発話の力(illocutionary force)をもつことが可能なのかを明らかにする。

本論の構成は、第2節では動詞 say の統語的特異性を論じた Munro (1981)を取り上げ、その問題点を指摘する。第3節では、直接引用文の埋め込み形式について論じた廣江(2012, 2014)を概観する。第4節では、遠藤(2009)が提案した、直接引用文と同じ付加詞節である周辺の副詞節の構造を概観し、廣江(2014)で提案された「素埋め込み(bare-embedding)」という統語操作を仮定した分析がより良い説明を与えることが可能なことを示す。第5節は結論である。

## 2. Munro(1982)

本節では、生成文法の理論的研究という文脈で、初めて直接引用文を伴う文構造の統語的側面を扱った Partee (1973)の、(直接)引用文とその引用文を発話した発話者を特定する主節との間にどのような構成素関係があるのか、という問題提起を踏まえ、直接引用文と動詞 say との統語的關係を明らかにしようと試みた Munro (1986)を概観する。

直接引用文を選択しているとは一般には考えられている、典型的な発話行為動詞 say がこれまで散発的に取り上げられ、他動詞が選択する目的語補部と同様、直接引用文も say に選択された目的語補部であるのと認識が一般的であった(e.g., Collins (1997), Collins and Branigan (1997), Moltmann (forthcoming), Rosenbaum (1967), Stockwell (1977), and among others)。まず、以下(1)に例示されているような構造を検討してみよう。これまで、(1)に示されているように、直接引用文は伝達節の動詞の目的語補部として選択されているとの考えが一般的であった。



ところが Munro は、そのような構造に、チカソー語を例に挙げ反論を行っている。<sup>1</sup>

- (2) a. “*Ihoo*” (\*-ā) *aachi*.  
 woman obj say  
 ‘He says, “Woman” ’.
- b. “*Hilha*” (\*-ā) *aachi*.  
 dance obj say  
 ‘He says, “She’s dancing” ’.

チカソー語では、(2)で観察されるように、目的語をマークする形態素-ā があるものの、直接引用文(また名詞あるいは名詞句)が後続する場合、その形態素は直接引用文にはマークされないことから、直接引用文は統語的な意味での目的語ではない、と Munro は主張する。<sup>2</sup>しかし、チカソー語に目的語であるかないかを区別する統語マーカーが存在するからといって、英語でも同様の主張が行えるわけではない。英語でも同様の主張が成り立つかどうかは、英語という個別言語内に、動詞 say に後続する直接引用文が目的語の位置を占めてはいないということを示す統語的証拠の有無にか

かっている。

さらに、Munro は、以下(3)のような例を証拠として、直接引用文が動詞 say の統語的目的語であると主張している。

- (3) a. What did John say?  
 b. John said, “Mary’s here.”  
 c. John said it/ that/ something.

(3b)で、it、that、something はいずれも目的語として項(argument)の位置を占める代名詞であることは明らかであり、そうした代名詞と同じ位置に生じる直接引用文は動詞 say の統語的目的語だと主張しているものの、その主張にも瑕疵がある。(3a)において、what は say の目的語の位置に項として外的併合(external-merge)され、その後、通常の目的語と同様、内的併合(internal-merge)という操作により文頭の位置に wh 移動されているが、(4)の例で観察されるように、(3b)における直接引用文が what と同じ項としてのステータスを持っているかどうかは疑わしい。<sup>3</sup>

- (4) What did Sue say?  
 a. Sue said that she would leave soon.  
 b. ?Sue said, “I will leave soon.”

(4)において、What did Sue say?という wh 疑問文に対する返答として、(4a)は適切だが(4b)はそうではない。発問者が先行文脈で発話された発話文の正確な復元を求めない限り<sup>4</sup>、(4b)は What did Mary say?の適切な返答になりえない。

以上、Munro (1981)における分析は、結局のところ、動詞 say と共起する直接引用文は統語的目的語なのか、あるいはそうではないのか。そうではないとすれば、どのような統語的ステータスを有するのかといった、直接引用文そのものの統語特性について明確な結論を出し得ていない。

### 3. 廣江(2012, 2104)

本節では、直接引用文そのものの特性について論じた廣江(2012, 2014)を概観する。直接引用文と共起する動詞は、一般に伝達(報告)・引用という意味特性を有する。

- (5) a. Mary said, “You’re a genius.”  
 b. John asked, “Is there anything I can help you with?”

(5)で観察されるように、その意味特性から直接引用文と共起する動詞は他動詞であることが予想されるが、必ずしもそうではない。以下の例を検討してみよう。

- (6) a. This guy saw me walking by with a cigarette and he went “Hey, you got one?”  
(山口(2009:219))  
b. The man laughed, “You really believe that's true?”  
c. He nodded, “Yeah, yeah.”

(6a-c)で観察される *go*、*laugh*、それに *nod* は明らかに他動詞ではなく、目的語として直接引用文を選択することはできない。こうした事実は、直接引用文が付加詞節 (*clausal adjunct*)であることを示唆している。直接引用文が付加部であるというさらなる統語的証拠として、直接引用文からの要素の取り出しができないという事実が挙げられる。以下の例における並行性を検討してみよう。

- (7) a. Francine whispered that we should turn down the stereo.  
b. Sue said, “John murdered a strange man!”  
(8) a. \*What did Francine whisper that we should turn down?  
b. \*Who did Sue say, “John murdered?”

(7a)(8a)の *whisper* は「発話様態動詞(*manner-of-speaking verb*)」と呼ばれているもので、その *that* 節は付加詞節を構成していると分析されていることから (Baltin (1982))、直接引用文も発話様態動詞の *that* 節と同様、付加詞節と仮定すれば、(8b)で観察される取り出しが(7b)と並行的にできない事実を説明することができる、と廣江(2012, 2014)は概略そう主張した。

#### 4. 提案

これまで提示してきた事実とそれに基づく理論的考察から、直接引用文が付加詞節であるという主張には理論的にも経験的にも妥当性がある。ところが、直接引用文が動詞（あるいは動詞を含む述部）に選択されない付加詞節でありながら、伝達節とは異なる発話の力を取りうる。その結果、その発話の力により引き起こされる主節現象 (*root phenomena or main clause phenomena*)が観察される。<sup>5</sup>

- (9) a. The husband said, “Is he a true police officer?”  
b. Bob shouted to me, “The answer, I was waiting for.”

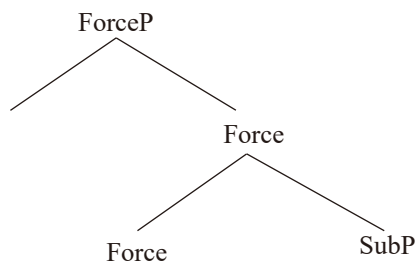
英語の場合、付加詞節では主節現象は生じないというのがこれまでの一般的な観察であった。以下の例を観察してみよう。

- (10) a. the analysis which the scholar has never referred to is known to the audience in the conference.  
 b. Jennifer married a man whom she happened to meet on a sightseeing tour.  
 c. The woman who John gave a present betrayed him.
- (11) a. \*the analysis which never has the scholar referred to is known to the audience in the conference.  
 b. \*a man whom did she happen to meet on a sightseeing tour.  
 c. \*the woman who a present, John gave betrayed him.

(10)(11)の例は関係節の例だが、事実、主節現象は観察されない。<sup>6</sup>にもかかわらず、同じ付加詞節であるはずの直接引用文においてなぜ主節現象が観察されるのだろうか。

この問題を考察するにあたり、遠藤(2009)の議論が参考になる。遠藤(2009)では、英語には中核的副詞節(central adverbial clause)と周位的副詞節(peripheral adverbial clause)の二種類の副詞節があり、周位的副詞節は従属節であるにもかかわらず主文に生じるはずのムード(mood)を表す要素やモダリティ(modality)を表す副詞が生じるだけでなく、主節現象が観察され、主節に呼応する付加疑問文も可能な統語環境であるという、Haegeman (2006)の事実観察およびその分析をさらに日本語にも適用し、カートグラフィック的アプローチに沿って、(文末に生じる)周位的副詞節の構造を、概略、以下のように提案している(SubP: subordinate phrase)。

(12)



(12)は、疑問、命令、断定といった発話の力を主要部にする Force が周位的副詞節を選択している構造となっており、例えば、Force が断定という発話の力を持っている場合、その Force に選択される副詞節は断定という発話の力を持つ仕組みになっている。しかしながら、本来、従属接続詞それ自体に固有の発話の力があり、従属接続詞

が投射する構造を選択する他の機能範疇がその発話の力を決定するというメカニズムは、直接引用文が副詞節と同じ付加詞節というステータスをもつとしても、そのままの形では受け入れがたい。

そこで、代案として、廣江(2014)で提案された「素埋め込み(bare-embedding)」を見てみよう。

### (13) Bare-embedding

$\alpha$  is bare-embedded in  $\beta$  iff  $\alpha$  can directly be embedded under a complementizer-less  $\beta$ .

素埋め込みという操作は、ある文法範疇をより上位の文法範疇に補文化辞を介さずに埋め込む統語操作であり、埋め込まれた文法範疇は上位の文法範疇の統語操作の対象とはならない。<sup>7</sup> 直接引用文の場合、直接引用文を伝達節に埋め込むものの、伝達節が有する発話の力と統合されることはない。このことは、以下の事実からも示される。

(14) a. John said (\*that), “I’m going.”

b. Mary asked (\*if), “Is there anything I can help you with?”

(14)のいずれの例においても補文化辞は許されない。補文化辞は伝達節が有する発話の力((14)の例ではいずれも断定)に埋め込まれた直接引用文が有する発話の力を統合する統語機能をもっており、補文化辞が許されないという事実は伝達節とは独立した発話の力を有していることを示している。

したがって、ここで提案している直接引用文が埋め込まれた文全体の構造は、概略、(15)のようになり、

(15) ... V ... [CP [C0] ... ]

本論での提案は、経済性の観点から言っても、認める必要のある最低限の構造で直接引用文の文法特性を説明できる。

## 5. 結論

本論では、直接引用文は付加詞節を構成しているという証拠を、こういった伝達節と直接引用文が共起しているかという点から英語という個別言語内で提示したこと、また直接引用文が伝達節とは異なる発話の力を持ち、結果として主節現象が観察されることを素埋め込みという、他の現象でも必要な統語操作に還元した点に意義がある。

註

\*本研究は、科学研究費補助金（採択番号 15K02068）の援助を一部受けている。本研究を遂行するにあたり、インフォーマントとして忍耐強くデータの文法性の判断に協力していただいた Josh Norman 氏それに Judith Rabinovitch 氏には感謝申し上げる。

1 チカソー語とは、米国ミシシッピ州北部にかつて居住していたマスコギアン族の一員であるチカソー族が話していた言語。

2 廣江(2014)では、韓国語の形態素-*i* がチカソー語の目的語マーカーと類似した機能を持つことが指摘されている。

(i) a. 그는 “알겠습니다”라고 대답했습니다.

Gumunni “alkkessumniida” rago daedapaessumniida

He I understand quote-marker replied

“I understand,” he replied.

b. Gumunni “alkkessumniida” \*irago daedapaessumniida

韓国語には、日本語の「と」に相当する引用マーカー *rago* があり、引用部分に名詞表現が来た場合、(0)라고 (*i*)*rago* のような拘束形態素 *i* が必ず付く。しかし、本論で扱う直接引用文が来る場合には、(20c)が示すように、いかなる環境でも *i* が付くことはない。

3 Munro (1981)では、What did you say?という疑問文には、他の動詞では観察されない形態素（ホカ語族）が what に相当する要素に接辞化されたり、動詞 say に相当する特別な語幹（ユト・ステカ語族カフィラ語）があるとの指摘がある。

4 (4b)も Sue が述べた内容の解釈、例えば repondent が Sue が述べた内容を varbatim に伝えたい、といった状況の場合は、もちろん適切な返答となる。

5 主節現象が生じる統語環境の詳細な分析に関しては、Jiménez-Fernández and Miyagawa (2014)を参照。

6 関係節でも主節現象が観察される例として、Jiménez-Fernández and Miyagawa (2014)は以下のような例を提示している。

(i) a. A university is the kind of place in which, that kind of behavior, we cannot tolerate.

b. Syntax is the kind of subject which only very rarely will students enjoy.

7 詳細は、廣江(2014)を参照。

References:

Collins (1997) *Local Economy, Linguistic Inquiry Monograph Thirty-One*, Cambridge, MA: MIT Press.

Collins, Chris and Phil Branigan (1997) “Quotative Inversion,” *Natural Language and Linguistic Theory*, 15, 1-41.

遠藤喜雄(2009)「話し手と聞き手のカートグラフィー」, 『言語研究』, 第 136 号, 93-119.

- Haegeman, Liliane (2006) “Argument fronting in English, Romance CLLD and the left periphery,” ed. by Rafaella Zanuttini, Hector Campos, Elena Herburger and Paul Portner, *Negation, tense and clausal architecture: Cross-linguistic investigations*, Georgetown: Georgetown University Press, 27–52.
- 廣江 顕 (2012) 「直接引用の埋め込みに関する覚書」, 『尚絅学園研究紀要 A, 人文・社会科学編』第6号, 99-108.
- 廣江 顕 (2014) 「直接引用文の埋め込み」『言語学からの展望 2013』, 福岡言語学会編, 九州大学出版会, 203-215.
- Jiménez-Fernández, Angel, L. and Miyagawa, Shigeru (2014) “A feature-inheritance approach to root phenomena and parametric variation,” *Lingua*, volume 14, 276–302.
- Moltmann, Friederike (forthcoming) “Levels of Linguistic Acts and the Semantics of Saying and Quoting,” in S. L. Tsohatzidis, eds., *Interpreting Austin: Critical Essays*, Cambridge UP.
- Munro, Pamela (1982) “On the Transitivity of the ‘Say’ Verbs”, *Syntax and Semantics* 15, 301- 318.
- Partee, Barbara H. (1973) “The Syntax and Semantics of Quotation,” in S. Anderson and P. Kiparsky, eds., *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Rosenbaum, Peter (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Stockwell, Robert (1977) *Foundations of Syntactic Theory*, Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
- 山口 治彦 (2009) 『明晰な引用, しなやかな引用—話法の日英対照研究』, くろしお出版.